

アメリカでJap(anese)として生きること

太平洋の向こう側に夢を求めた日本人男子のモノグラフから

杉野俊子

Living in America as Jap (anese)

From the Monograph of one Japanese Male Seeking a Dream over the Other Side
of the Pacific Ocean

SUGINO Toshiko

はじめに

1941年(昭和16年)に、「海は広いな 大きいな 行ってみたいなのよその国」という童謡が国民学校1年生用の音楽教科書に掲載された。外洋のことを歌った童話は、海に囲まれた日本のような国特有の童謡であろうが、この時代、よその国とはアメリカを指していたのだろうか。

世界地図を前にして想像するに、アメリカへのヨーロッパからの移住は大西洋を「跨ぐ」新大陸への移住であるが、日本からは大洋を「越えての移動」であるから、それだけでも容易でないことは想像に難くない。それではどのような日本人が敢えて海を渡ったのだろうか。

海を渡った日本人とは、日本政府の奨励で、困窮した生活から逃れるために、ハワイや遙か遠いブラジルにまで渡った出稼ぎ労働者を指すと一般的には思われている。その他に、公費留学した一握りのエリート、私費留学生、書生の他、個人な動機で渡った者もいるが、後者の存在はあまり知られていない。

本論では、1913年頃、個人的動機で遙か彼方のアメリカまで海を渡った鈴木無絃(1879-1956)が書いた『驚き入つる母国の社会(1924年)』を基に、一介の元海員であった鈴木が、カリフォルニア州で起きた排日運動等についてはほりアルタイムで語っている体験談や個人的見解を抜粋して描く。また、鈴木のように、政府の移民政策やエリート留学とは関係なく、全く個人的に太平洋を渡って行ったアメリカから、夢破れて日本に帰らざるを得なくなったのは、当時の日米関係とアメリカ政府の移民政策に依るところが大きい事と、また出

稼ぎ労働者であれ、エリートであれ、当時アメリカにいる日本人は、人種差別と偏見の対象となったという事実を、日系アメリカ人の総体像と合せて、浮き彫りにしていきたい。

本論では、特に1900-1924年の日本人移民に焦点を当て、鈴木無絃の本を基に、1. 日本人移民史の概要 2. 鈴木無絃という人物と、エリート指導者の代表である新渡戸稲造との相違 3. 排日運動と考察の順に書いていく。無絃の本を基にするのは、中流家庭出身の一介の日本人男子が、1920年代にこのようなエッセイ本を残すことは資料として価値があると判断したからである。この本を通して、新渡戸稲造が夢見た「太平洋の架け橋」の向こう側にあった現実と、海を越えて国境線を広げていった日本、それを一旦は受け入れたが、後に締め出そうとしたアメリカの世相を浮き彫りにすることで、アメリカ移民研究の新しい視点の可能性を示唆したい。

1 日本人移民の背景

15世紀に始まった「大発見」・「大航海」時代を経て、19世紀以来、ヨーロッパ諸国からの移民がアメリカ大陸に押し寄せてきた¹⁾。大西洋を渡ってきたヨーロッパ人だけでなく、太平洋の波濤を超えて、東アジア人—清国人と日本人—が、アメリカの西海岸へ渡ってきた。前者の意図は、移住者として定住することで、後者は一時的な滞在と就労を目的とする「海外出稼ぎ」であった²⁾。もちろん、アメリカ合衆国が「移民国家」だという前提に基づいていなければ、いずれの場合も実現が不可能であった³⁾。

太平洋側からアメリカへ渡る

アメリカへの初期の移民に関してはすでに多くの研究がなされている⁴⁾。19世紀に日本人がアメリカ移民を始めた理由として、タカキ・ロナルド(1995)は、アメリカ膨張主義がはるか太平洋の向こう岸(日本)にまで届き、欧米化するために明治政府が課した重税のために、1880年代に農民たちが厳しい経済的苦境に陥ったためであり、アメリカの外圧によってこのアメリカに押しやられたからだと述べている⁵⁾。さらに、西南戦争後の不景気や米価の低落のため農村から流失して労働者になった農民の多くが、そのすさまじい苦境から逃れる道を海外に求めた結果でもある⁶⁾。

それゆえ、1885年(明治18年)に、日本・ハワイ政府間の協約によるハワイ官約移民の第一回の募集があった際、600人の募集に対し28,000人も応募者があったのは必然の成り行きであった。その募集を終了するまでの10年間で、3万人に達する日本人労働者がこの制度の下ハワイ諸島に渡っている⁷⁾。1880年代にアメリカ本土、特に西海岸の労働力不足を補うため、1908年には本土への日本人移民は10万3000人を超えた。その中には1898年のハワイ併合後、ハワイから本土に渡った3万人を超える労働者も含まれる⁸⁾。また1894年の移民保護規則を契機に移住が組織的に行われるようになり、民間業者に労働力を斡旋する仕事が行われ、移民の奨励はさらに盛んになった⁹⁾。

しかし、「移民は経済的に困窮した最下層である」「貧農の二男、三男が日本で生活できないので、海外出稼ぎに赴いた」という従来の説は誤った固定観念であると、最近の研究で明らかにされ始めた¹⁰⁾。なぜなら、アメリカへの移民は、船賃、旅券申請費用、見せ金、諸経費をまかなうために高額の費用がかかったので、移民予定の人々は土地を売るか親類や知人に借金してお金の調達をしなければならなかった¹¹⁾。その上、当時の日本は中央政権国家だったので、渡米許可を政府に申請する際、申請者が健康で文字が読め、「日本の国威を保つ」ことができる人物かなど申請を規制することができた¹²⁾。日系移民が入国した1908-1924年の間に、農場労働者・労働者・家事労働者は30%だけで、その他は40%近くが専門職・ビジネスマン・熟練労働者であり、30%以上が自営農民であったという数字が、ある程度の教育と財産の保証が必要であったことを物語っている¹³⁾。

また、明治維新後、ヨーロッパ、アメリカがお手本だった日本で、福澤諭吉などの知的指導者たちが「自由の聖地」としてアメリカを理想化したこともあり、直接外国に行って知識を学ぶ「洋行」「留学」は、青年たちの大きな夢となった¹⁴⁾。1884年(明治17年)頃、西海岸へやってきた自称「学生」と称する日本人書生は、東海岸の有名大学へ留学できた裕福な日本人子弟とは異なり、ほとんどが家内労働などで滞在費、生活費、授業料などを稼がないといけな貧乏書生であり、1882-1890年にはそのような私費留学生在が旅券発行の43.7%を占めた¹⁵⁾。彼らの多くは、出稼ぎ労働者と同様に、排日気運が極度に高まった1900年代後半に、アメリカ滞在の長期延長を真剣に計るようになっていた¹⁶⁾。

2 鈴木無絃(1879-1956)という人物

筆者の祖父にあたる鈴木無絃こと鈴木画一郎は、1878年(明治11年)に現在の磐田郡竜洋町に鈴木家の四男として生を受けた。新渡戸稲造が1884年(明治17年)に初めて太平洋を渡り、サンフランシスコに向かった6年前のことであった。両親は地元では名主として小作人を使って農業をしていたようだ。鈴木画一郎の長兄である鈴木七二郎は、現在は浜松市である可美村の十代目の郡長で、六回も歴任したほどの人物だった。しかし、筆者の祖父にあたる画一郎はといえば、いわゆる一家の「厄介者」であり、評判は芳しくなかった。

画一郎が欧米と接触を始めたのは、太平洋横断の客船が三隻しかない三船時代で、日本郵船に合併する際にその船会社を辞めて、妻子を日本に残して1913年頃初めてアメリカに移民として渡ったようだ。しかし、それから約20年後、昭和10年(1935年)に、画一郎の息子の鈴木健が、当時教師をしていた上海に呼び寄せるまで、画一郎の消息は定かではなかった。1983年に鈴木健の二男で画一郎の孫にあたる鈴木善勝がスタンフォード大学に客員教授で招致された折、カリフォルニア・ファーストバンク日米歴史資料室の室長であった故岡省三氏の尽力で情報が集まり始めた。その際に、画一郎が鈴木無絃という号で、「驚き入る母国の社会」という本を大正12年(1923年)11月(1924年に再版)に出版していたこと

が判明した。2008年12月になって初めて、その本を実際に国立国会図書館から入手したという経緯がある。

画一郎のむすこの鈴木健の断片的な記憶と、集めた資料や、「驚き入つる母国の社会」の中の情報から判断すると、画一郎は、日露戦争後に創立した扇章汽船会社へ入社し、税関業務の事務長として海上生活と陸上勤務で10年余り勤めた。その間、ヨーロッパや南北アメリカの諸港を見学して回り、欧州大戦の際に船員を辞め、大正初期（1913年）に移民として米大陸へ渡った。

再び米大陸へ渡り、犁鋤（すき、くわ）をとって田園生活をなし、一時に富を作り、帝京に遠思の佳人を喜ばしていささか得意であったが、たちまち事業の挫折で元の木阿弥、在米六年間の苦心は一朝空に帰した。しかして敗後の五十郎は故山の風月に心身を養い、元気を一新して徐々に再起を謀らんとし、妻女同伴再渡航の証明書を携えて、母国観光の名義で一時帰朝した¹⁷⁾。（本文中の「五十郎」とは鈴木無絃を指す）

これは大正12年頃の話だが、その後一時日本に帰国し、仕事、家族離散、経済的打撃など苦労を重ねた後、大正14年（1927年）に再度渡米した。

日本人と言って威張って、母国へ帰って来ても、私には日本の国土に身を入れる一坪の所有地のない、また雨露をしのぐに足る程の家をも持たぬ。米国に在っては土地所有権や小作権の禁止問題で、排日派からさんざん虐められたが、母国へ帰れば（中略）いわゆる無産階級とやらへ仲間入りした五十郎には、地主となり家主となり得る望みは将来にはない。生活の安定がない五十郎の如きは、真正なる日本の国民と称する資格がないかもしれぬ¹⁸⁾。

無絃の著書「驚き入つる母国の社会」

鈴木無絃著による「驚き入つる母国の社会」は日米の文化・作法・習慣などの違いを120のトピックに分けて書いた、今でいう異文化コミュニケーションのエッセイ本である。無絃は、この本で主人公に「五十郎（いそうろう）」と名付けているが、本人の写真や自作の短歌を載せていることや、上記の記述からも私小説であることがわかる。アメリカ文化を称え、日本文化批判と取られかねないことを懸念してか、無絃は「外国人が見た日本観」だと思ってくればよいという趣旨のことを書いている。

日米社会のありかた、日本の女性のありかた、アメリカの政治の仕組みや、大農式耕作を紹介の他、政治家や官僚に対する批判も含んでいる。たとえば、日本式旅館へ「今一つ旅館に改良したく思う事は、食膳を銘々客室へ運ばず、一定の時間に食堂に集まることとし、社交と衛生主義にかなう様食事の時間を十分長くしてほしいのである。」と提言している¹⁹⁾。また、「エチクエット」のセクションでは、「西洋の作法にドント（勿れ）」という数多くの標語がある。これらが皆母国の社会に適応できるか出来ぬか知らねど、試みに訳してもって列記し参考に供したいと思う。1. 乗馬でも徒歩でもまた車に乗っても、右側（日本では左

側) 通行を忘れるな。2. バカ面をして人の身なりを打ち眺め嘲るような笑いをするな。3. 婦人の頼みごとには喜んで手を貸すのを忘れるな²⁰⁾」と書いている。

むすこの鈴木健の書簡(1983年1月)に、「鈴木無絃は、独り暮らしで、職場も転々としていたらしいので、知人なども余りなかったのではないだろうか。ただ移民の中ではインテリだったので、心のうっぷんを文章にと書き留めたのかもしれない。邦字新聞にもサクラメント時代に無絃という号で記事を書いていたようだ」と記されていた。

知的エリート「新渡戸稲造」との相違

前述のように、移民という言葉には、出稼ぎ労働者というイメージがついてまわるが、無絃こと画一郎は、金銭的に恵まれぬ中、亡くなるまでソフト帽とコートを身に着け、紳士であり続けようとした。当時の日本人移民の様相をさらに浮かびあがらせるために、ここで敢えて、エリートで知的指導者グループの1人であり、国内外に知れ渡っている新渡戸稲造博士と鈴木無絃の相違点を指摘していく。

新渡戸稲造の人となりは周知のことなので、ここでは佐々木篤著の「アメリカの新渡戸稲造」から概観だけを述べる。まず、新渡戸稲造が留学先をアメリカにしたのは「太平洋の橋」を夢に描いて、それを実現するための第一歩として、札幌農学校から東海岸のボルチモアに留学したと言われている。その数か月後に同級生の内村鑑三が、2年後には宮部金吾も官費留学生としてハーバード大学に留学した²¹⁾。新渡戸には、日本人の先輩や同期、アメリカ人(白人)の牧師やその家族、実業家のウィスターモリス氏との交流など、常に援助してくれる者が回りにいた²²⁾。もちろん、ボルチモアでの留学生活は生活費と学費かせぎに追われる苦しい闘いであったが、それでもアメリカ人の妻、メリー・エルキントンとの結婚、自身も留学経験があり後に北海道大学総長になった同郷の佐藤昌介が、ジョンズ・ホプキンス大学に誘ったりドイツ留学の道を開いてくれたりと、機会に恵まれていた²³⁾。帰国後、日本の要職を歴任し、「武士道」の執筆で世界中に名をはせたのは周知の業績である。

カーネギー財団と渋沢栄一が、日米関係の悪化を懸念して1911年に日米交換教授が計画し、その交換教授として渡米した新渡戸稲造の目的の一つは、日系人にできるだけアメリカに同化するよう説得することだった²⁴⁾。

その際、新渡戸稲造は「日系人はアメリカに在住すべきこと、偏狭な愛国心に駆られて小成に安ずるのは愚かなことであること、英語を学び、アメリカの道德観念を取得すべき」と講演した。その点からすると、鈴木無絃は立派な日本人移民であったと言える。

しかし知的指導者のグループとは違って、鈴木無絃がアメリカで成功しなかった要因の一つは、日本でもアメリカでも基盤になる団体に属していなかった点だと考えられる。少なくとも留学生であれば、アメリカ社会に基盤を置きやすかったと思われる。また、「定期船・県人会・日本語」が当時のシアトルの日本人移民社会を象徴していたが、無絃には広島県人会や和歌山県人会のように大規模な県人会の後ろ盾もなかった²⁵⁾。

エリート留学生が日本に帰国後要職に就いたり、大学を創立したり、貴族院議員になったりする中、人脈や社会基盤のない無絃にはそのような機会も皆無であった。しかも、小金もちでそこその英語力があったため、いわゆる出稼ぎ労働者とは深い親交があったとは思われない。キリスト教上、三村時代を築いた松村介石が唯一名の知れた知人だったようで、松村の主催する「道」という機関誌の投稿を通して私淑していたようである。鈴木無絃が、クリスチャンであったなら、アメリカや日本の社会で基盤が見つかった可能性はある。

いずれにしろ、当時アメリカで日本人であるということは、それが出稼ぎ労働者であろうが、エリートであろうが、差別を免れないということだった。「太平洋に橋をかける仕事は、太平洋の向こう側アメリカでは、無知と人種偏見、排日との闘いであった」と、エリート留学生の新渡戸稲造も実感したことであった²⁶⁾。

3 日本人排斥の波

(1) 人種偏見と差別

1890年代から1941年12月7日までの約50年間、カリフォルニア州と日本の間の状態は、宣戦布告なしの戦争状態のようであった²⁷⁾。つまり、アメリカ、特にカリフォルニア州の日系人は、移民を出自とするエスニック集団の一例であると同時に、アメリカ人種主義の抑圧を経験した集団としての側面も持っているということである²⁸⁾。19世紀後半から、多くのヨーロッパ系非プロテスタントの新移民たちは、黒人やアジア系移民との「相違」を強調することで、自らの「白人性」と「アメリカ人性」を強調してきたので、その文脈において排除と包摂なしに、初期アジア系移民について議論することはできないのである²⁹⁾。

たとえば、アメリカ本土への日本人移民が10万3,000人を超えると、アメリカ人は日本人出稼ぎ労働者を「脅威」として認識し始め、1907年の不況の原因は日本人増加のせいだと白人労働者が非難して、人種差別と偏見の対象となった³⁰⁾。確かに、他の「有色人種」、たとえば人口が減少傾向にあった中国人とアメリカインディアンにくらべて、日本人の人口増加は相対的に短期間に増加する傾向にあったが、それでも1900年の総人口の0.7%から1920年に2.1%に増加したに過ぎなかった³¹⁾。

人口増加に関して、無絃は以下のように述べている。

マルサスの人口論などを引き合いにするまでもなく、我が日本の如く某大な民族を有し、面積の割合に人口の多き国に在りては、将来否な現在既に何等かの方法に依り領土の拡張を謀り、過剰せる人口を移住せしむる道を開かなければならぬ。統計表の示すところに依れば、現在海外在住の日本人は、約五拾八萬人にして、之れを大別すれば、関東州及び満州18万人、北米合衆国13万人、ハワイ諸島11万人、シナ（関東州及び満州以外の地）6万人、ブラジルなど南米諸国5万人、その他歐羅巴メキシコ南洋諸島など5万人にして、大正4年には総計約30万人、同7年には49万人を算し、漸次増加せ

るは国家の為喜ぶべき事なるが、併し日本人口は一ヵ年約 60 万近く増加するを以って、総計僅かに 58 万人の海外在住者を有するからには、実際一ヵ年の増殖数にも足りないのである (258-259)³²⁾。

また、同期間に、写真結婚の花嫁は紳士協定から除外されていたことを受けて、日本人女性の数が 300% 増加し、日本人移民は高い出産率を示したので、カリフォルニア州の白人居住者たちの緊張を高めた。排日運動家たちは、将来の競争や対立に不安感をおぼえたのか、子どもをたくさん産むという日本人移民女性に対して厳しい批判を続けた³³⁾。

加州排日派の巨頭インマンと云う男は、無礼にも在留同胞を目して多産動物だと云ったことがある。米国官憲の調査する所によれば、在留日本婦人の出産数は非常に効率を示して居る。又、事実にあいて西部太平洋沿岸にはママさん、パパさんと呼ぶ、頭髪の黒い日本児童が沢山いるのである。尤も米国の或会社では、近来経済的出産法と称して、科学を応用し盛に産児の制限を実行するので、其れと比較されるゆえ日本婦人の多産が一層目立って見ゆるのである (9)³⁴⁾。

写真結婚禁止問題に関して、鈴木無絃が日本に戻っている時に、青年の一人が来訪して、是非この問題について話をしてほしいと言われ、それについて述べたくだりがある。

この問題はすでに過去の事に属し、今日の話題としては如何かと思われたが、血気盛んにして海外渡航の志望を有する青年に取りては、あるいは多少興味のあることかと思ひ、概略を語ることにした。ただし、写真結婚の語はすこぶる不真面目にして、同胞に対し一種侮辱の意味を含むをもって、法語としては海外結婚とするが適当であろう。(中略—ここで婚姻制度について説明) 米国へは前述の次第にて新婦の呼寄せは今のところ絶対に不可能である。ただし夫なる者が自ら本国へ迎えに来れば、所詮写真結婚の意味が消滅するゆえ差支えない、と説けば、それならば安心、海外へ渡航しても独身で暮らさなければならぬ事はないから、と青年は皆嬉しそうな顔 (302-306)³⁵⁾

1905 年 (明治 38 年) 2 月 23 日、『サンフランシスコ・クロニカル』紙は一連の扇動的な記事を載せ始めた。記事の見出しは、「犯罪と貧困」アジア人労働者が持ち込み」「公立学校のやっかい者、黄色人種」「米婦人の脅—日本人」「白人の頭脳を盗む黄色アジア人」と、黄色人種が白色人種に禍を及ぼすという白人間の架空の説であるが、「黄禍」の扇動には効果的であった³⁶⁾

夢を抱いて海を渡ったハワイでも、日本人移民は気がつくや、肥料と同じ供給品として扱われ、韓国やフィリピンのような他国籍の労働者と対抗させられ、熟練職から除外され、軍隊組織のよう厳しい労働環境に置かれていた³⁷⁾。1915 年のハワイの日本人労働者は、「チャンスがないんだ。肌が白くなければそれほどいい地位に昇進できないし、いい給料ももらえない。一生ここで働けるんだが、ハオレ (白人) なら、仕事について何も知らなくてもあつという間に、頭越しに先に昇進できるんだ」と述べている³⁸⁾。

加州に於ける日本人は一つの勢力である、勢力であるが故に排日の声が起こる。これは自然の勢力である。都会においても日本人の勢力はかなりさかんであるが、田舎における農業に至っては驚くべきほどにして、州内いたるところに大なる発展を遂げ、又漁業も優勢にして南加方面に於ける同業の大半は、日本の手に依って支配されてをる。

それ故、米国の識者中には愛国の至誠よりして、国民生活の要素たる衣食住中最も主要なる食物に関する農業と漁業が、外国人たる日本人の勢力範囲にあるはまことに寒心すべき事にして、一朝事ある日には如何となすかと論じる者があって、米国の土地は米人の手にて耕すべしと叫び、さかんに宣伝が行われている。尤もこれは米人の立場より見れば無理ならぬ事、自分ごとき国家主義を標榜する者には、自ら排斥せられながらも同感たらざるを得ない。実際今日に南加及中加方面より一時に日本人の農業家を引き揚ぐるならば、羅布市付近在住の米国人は餓死するに至らんと云うも敢えて過言でない、又河下（かわしも）と称させるスタクトンには、馬鈴薯王（ポテートキング）で有名な牛島氏があって、白人常食のポテートの相場を一人にて変動せしむるだけの勢力を有して居る、これらの事実がある種の米人の眼に映じ、一つは猜疑心となり、又一つは恐日病となりて、排日の主なる原因をなすのである（295-296）³⁹⁾。

1870年（明治3年）から1920年（大正9年）まで、カリフォルニア州における反東洋人扇動は、当初からサンフランシスコを本拠地とする強力な労働組合運動によって支援され、その初期の指導者の大半はアイルランド人であった⁴⁰⁾。当時のアイルランド移民自身が東部の工業地域で非難されていたので、西部沿岸での東洋人に対する攻撃はそれをかわす意味もあった⁴¹⁾。

かつて郵船会社のロンドン支店に根岸某なる者があって、法人との対話中我が英国を連発し終に「我が英国」で有名になった。自分もまた加州を呼ぶに我が加州を以てしたく思う。よって我が加州には在留同胞中、20年も25年も住んで居る者が沢山あったまには30年以上の者もある。中略。

然るに加州を我が物顔をして排日騒ぎをする白人は如何を云うに、自ら加州人と称する資格なく者が多い。彼らは所詮欧州移民として亜米利加へ渡り、古代の蛮民が水草をおうごとく転々として所々を流れまわって西方加州へ来り、此処に始めて楽園を見出し、わずか2年か3年も経たぬうちに、米国の市民となり土地の所有権を得、毛布一枚が全財産なりし一介のトランプ（浮浪者）が、ただちに大地主になり代わって、不遜にも永住せる吾々同胞をジャップ呼ばわりし、無法極まる手段を以て排斥せんとするのである（298-299）⁴²⁾。

1907年に発行された書簡集に、「ジャップ」のステレオタイプとして、出っ歯で、メガネをかけ、ずるく、おしゃべりで、ごう慢で、不誠実な人物が描かれていた⁴³⁾。懸念だった日韓人学童隔離は実行しないことになったものの、排日事件は続き、1906年一年間で、日本人連合協議会に届けられた被害は57件もあった⁴⁴⁾。しかし毒気を含んでいるという点で

は、1920年の扇動はカリフォルニアで起きたどの扇動よりも上回っていた。大衆に人気があったピーター・B・カインの『パロマ山の誇り（1921年）』の小説で、「日本人の作法はけがらわしい」「日本人はどん欲で、利己的で、勘定高く、けんか好きで、疑り深く、小才がきき、怒りっぽく、信頼できない」という日本人非難をあげたことは、1920年（大正9年）までにカリフォルニア州民は、日本人や他の東洋人を憎むように徹底的に訓練されてしまった証拠であると言える⁴⁵⁾。

元来米国人の心理状態は不可思議で、吾々日本人には諒解に苦しむ点が多い。表面的には口を極めて排日の必要を説きながら、裏面に廻ってしきりと日本人を歓迎し所有地を高く売りつけんと運動する。小作権においてもまたその通りである。彼等米人が愛国的標語をもって、米国の土地は米人の手に依って耕すべしと叫べとも、実際今日米国の青年は農園の労働を好まず、楽な指先の仕事をして派手やかな都会で暮らすを理想としている。そして農園生活をするといっても、自らは地主となりて人に小作せしめ、毎日自動車を飛ばし遊んで渡世をせんとする者が多い。又米人は農業に従事しても日本人ほど勤勉に働かず、その上技量に乏しき故、日本人ほどの収穫を揚げえず、競争に於いて到底日本人に及ばない、この競争に及ばないことが、排日の原因となれば又歓迎の理由ともなる（325-326）⁴⁶⁾。

(2) 土地所有禁止法

そこで、日本人は農業を通して受け入れてもらう戦術をたてたが、その戦術は人種の排斥の深さを読み取っていなかったとタカキ（1993）は分析している。なぜなら、日本人の農民としての成功がさらなる排斥を生み、1907年の不況の原因は日本人の増加によるものだと白人労働者が非難し、1908年には連邦政府は日本に圧力をかけ、労働移民を禁止し、それが1913年のカリフォルニア州での外国人の土地所有を禁じた土地所有法につながっていったからだ⁴⁷⁾。

我が日本の官民が、帝都復興火災保険の諸問題をもって混雑せる虚に乗じ、米国の排日派は、この機会にその目的を達成せんと謀り、突如として一大鉄槌（てつつい）を我が民族の頭上に下したのである。中略。加州における外国人土地法実施の結果として、地所の所有権及び小作権を失った在留邦人は、最後の方法として労力を提供し収穫物請負の契約をなすの形式をとりしが、米国最高法院の判決により、それをも否認され、如何なる名義をもってするも土地の使用を許さざる事となった（8）⁴⁸⁾。

無絃はまた同胞を思いやり、以下のエッセイを書いている。

現在（1923年）に於いて日本人の所有する土地は、およそ三種の区別がある。即ち第一は西暦1908年加州の州法にて制定せる外国人土地所有権禁止法の実施前に、所有の権利を得て現在既得権として認められるもの、第二はその実施後米国の市民権を有する子女の名義をもって購買せる物、第三は同じく其実施後米国人と合同し会社を組織し、

法人として私有権を獲得せるものである。第一においては既得の所有権は法理の原則として不可侵であるから、いかに乱暴な排日派でもこれを如何ともする事が出来ない。第三の中には私有権の取得の手續上不正の点ありとし、検事の告訴する所となり迫害的に没収されんとした者がある。其の最も著名なる事件は、南加に於ける原田事件と、中加に於ける隅田事件であった。(中略) 結局、原田事件は勝訴を得たが、不安は一般在留同胞の心裏より去らないのである。(中略) 加州の官憲は立法の精神と云えども、元來外国人土地所有権禁止法案は、排日を主なる目的として、その精神には極めて不純の要素を含んでいるのである。されば在留同胞が其対抗策として、国法の許す範囲において、最も賢明に行動せんとするは自由にして又当然の手段である (318-319)⁴⁹⁾。

(3) 排日法

1922年、合衆国最高裁判所は、帰化の申請を出した日本人移民に対し、「明らかにコーカサス(白人)人種ではない」という理由で市民として帰化する権利を否定し、1924年の移民法で「市民となる資格のない外国人の入国を禁止した⁵⁰⁾。この移民法は、西欧・北欧からの移民の入国を有利にしようとするもので、その中に「日本人」という表現はないが、「帰化不能外国人の入国禁止」を定める付帯条項を含むので、帰化権のない黄色人種である日本人移民を自動的に締め出すことになるため、排日移民法と呼ばれている⁵¹⁾。日本人である一世の親たちは、アメリカで教育を受けた日系アメリカ人である二世たちが「仲介者」として、東洋と西洋、移民社会と主流社会への架け橋になるだろうと期待したが、市民権と教育をもっても、「日本へ帰れ」とか「Jap(ジャップ)」と言われ、人種差別から逃れられないことを二世代はまもなく悟った⁵²⁾。

日本人移民の間では、この法律を通したアメリカ政府が非難された一方、日本政府や外交当局者に対しても、適切に阻止できなかったとして非難が起きたが、同時に、日本人移民各自の「無自覚」「無関心」も批判し、日本人移民社会の「自立」の強化が促された⁵³⁾。

又米国の議会には昨年12月上旬排日を目的とする三種の憲法改正決議案が提出され、直ちに両院立法委員会に付託された。この三種の決議案は大同小異にして、大略左の二項により成る。1. 米国の帰化権なき両親より生まれた子は、その後米国の国籍および帰化権を認めず。2. 米国内によって生れ、すでに国籍及帰化権を取得した者といえども、その両親にして米国の帰化権を得る権利がない場合は、本法律成立後、直ちに米国籍および帰化権を喪失す。(略)

この立法の精神は、日本人が米国生まれの子女の名義をもって、土地を買い所有権を設定せんとするを防がんとするに在るに疑いなき所である。我が在米同胞は人道を無視せる無法極まる排日的法案のため、過酷なる圧迫を加えられしも、忍耐したる緩和を思つて一步一步譲歩し、今は唯だ最後の望みとして米国の国籍を有する児童の成長を楽しみ、公民権獲得の時期を待ちつつありしにも、これをも奪はれんとするに於いては全く

絶体絶命である (8-9)⁵⁴⁾。

鈴木無絃は、人種問題に関連した米国憲法にも言及している。

米国憲法によれば帰化権を得らるる人種を黑白二種とするを以て、この二種の人種中いづれにも属さざる黄色人種は、法律上帰化の特権を認めずというのが、米国人多数の解釈にして今日のところには日本人の帰化権は否認の姿となっている。然しながら之を米国建国の当時にさかのぼって考えれば、当時の立法者には幾百年の後に、東洋人種が太平洋沿岸の諸州へ幾十万の多数が入込来て、こんな面倒な問題を引き起こそうとは予期せぬことであつたろう、何かと言えば之は米国憲法の不備の点にして、公平無私なる建国の祖ワシントンの大精神に訴えたならば果たしてどうであろうか (422-423)⁵⁵⁾。

(4) 米市民権不適合

排日運動の始まりは、1890年にヴォルガヴィルで起こった排日事件が記録上の最初のものとしてされている⁵⁶⁾。組織的な排日運動の第一歩は、1900年のシアトルとサンフランシスコにおける一般のアメリカ人による反東洋人扇動だった。サンフランシスコの第一回反日大集会では、スタンフォード大学の社会学者のロス博士が、日本人が好ましくない理由として、次の4点をあげた：①日本人は同化することができなかった、②日本人は低賃金で働き、そのためにアメリカ人の労働者の現行の労働基準をくずした、③日本人の生活水準は、アメリカ人の労働者の生活水準よりはるかに低かった、④日本人はアメリカ民主主義の制度にふさわしい政治的感覚を欠いていた、である⁵⁷⁾。

また、排日論者は、白人との体型の違いが顕著であったこと、英語の習得が全般に遅かったことで、日本人は他の移民より同化が遅いと受け止めていた⁵⁸⁾。ヨーロッパ系新移民は「白人」であるがゆえに、アジア人や黒人と異なってアメリカ化を達成する資質を備えている。つまり、英語を学び、勤勉で、近代的な労働者になることが可能である、ということである。一方、「帰化不能外国人」と判断された日系移民は、「アメリカ化」できないことを意味するので、それが排日運動にむすびついた理由でもある⁵⁹⁾。

そのような流れの中、日本人を擁護する意見もあった。1900年代後半に、ホーマー・リーは、反東洋主義で人種主義者だったにもかかわらず、アメリカの日本人移民政策は、アメリカという「共和国のなかにカースト制」をつくりあげてしまったと、その本質的な欠陥を指摘して警告を与えた⁶⁰⁾。

さらに、マクウィリアムス (1944) はその著書の中で、日本人ほど、アメリカで成功しようと固く決意して努力した移民集団はいないと述べ、移民委員会の「大部分のほかの人種が遭遇したことの少ないような多くの障害、つまり、偏見という障害、分離という障害、言語の大きな相違を克服したのは、(日本人の) 向上心によるものである」という報告や「アメリカ人に非常に近寄ろうとした」という証言も紹介している⁶¹⁾。

しかし、最高裁が1923年に出した、日本人は「米市民権不適格」という判決により、ア

アメリカ社会に受け入れてもらいたいという日本人の希望がみじんに砕かれた⁶²⁾。その理不尽さに憤って鈴木無絃は、彼の著書の最後の方で、以下の希望を述べている。

東洋諸国中米国と条約上対等ならざる国に在りては元より論なきも、日本は国交上米国と対等の地位に在りて、また条約上ともに最恵国にして特別の関係を有している。しかるに単に人種的観念を以て差別待遇をなすは、独立せる文明国を遇する道ではない、日本は多年日米親善のため誠心誠意をもっと努力し、幾多の犠牲を払ったのである、例えば紳士的協約の厳守など、(中略) 自国の不利不便を忍んで米国の希望を容れ、屈辱とするまで譲歩したのである。然るに米国が只だ一事両国の国交を脅かし、国際友好に支障をきたさんとする帰化問題を解決せんとする誠意なきは、太平洋上の平和の為に憂慮に堪えざる次第である。聞くところによれば洪沢・藤山氏などを常務委員とする日米関係委員会にては、日米連合照会委員会設置を提案し、これが根本的解決をもとめんとする由なるが、すみやかに実行されん事を望むや切矣。さらに、またこの種の運動が母国社会の各方面に続々起こらん事を熱望する (323-324)⁶³⁾。

(5) 日米関係について

鈴木無絃は、「驚き入つる母国の社会」の中で、多くはアメリカと日本との文化や風習の差について言及しているが、女性参政権を含めて、日本の女性も自分の実力を養い社会で活躍するようにと、女性問題にも言及している⁶⁴⁾。

さらに鈴木無絃は、五十郎を通じて、当時は大変微妙なトピックだった日本とアメリカの戦争について、日本人移民の立場から語っている。

五十郎は在米中しばしば在留同胞間に行わる雑談を立ち聞きする機会を得た。いざ日米戦争の開始という時はどうするか、或る者はいわく、母国へ引揚げんと、又或る者はいわく、決死隊を組織して最後まで戦わんと、更に又或る者は曰く、銀行の預金を懐にして、可愛いワイフや子供の手を携えて逃げんのみと、しかして一同相顧みてかかとうち笑う。これは元より一場の戯談に過ぎずして深く論じるに足らずとも、米国にして暴慢なる今日の態度を改めず、在留同胞を虐待するにあつては、この問題は事実となりえるやもしれず、其局にある者は戦和両様の覚悟あるを要するのである (324)⁶⁵⁾

軍備が平和の保証である以上国力に相当する防備をするは当然の事である。米国が太平洋上の暗雲を一掃し永久の平和を保持せんと企画しながら、暗に日本を仮想敵とし、自国に有利なる方法を以て軍備を制限せんとするは矛盾ならずや。将来日米関係がはたして親善を増すか、また反感を強むるかは五十郎などの知るところではない (中略)

然らば日米若し戦の結果は如何、これについては米人は米国、日本人は日本が勝つと云い、又双方爾(し)か信じるが人情の自然である。日本の軍閥派中には軍事的専門の知識を振り回し、日本の勝利を説きさかんに気焰を吐く輩(やから)があるが、これと同様に米国の軍閥中にもまた、米国の必勝を論ずる者もある。しかし五十郎などより見れ

ば、もし両方共勝つとすれば、その結果は負けるに等しい事になると思う (314)⁶⁶⁾
最後に、日本政府にも五十郎の口から無絃自身の意見を吐露している。

今やわが在米同胞は多年の辛苦経営に依り、しばらく基礎を築きあげて、労働者の境遇を脱し資本家の階級に移り又移らんとしている。しかるにこの際ますます無法なる排日運動に脅かされ、戦々恐々おして不安を感じ、只でさえ海外に心細く暮らして居る者が、不公平極まる差別待遇を受け、過酷なる圧迫を加えられては十分な活動ができず、或る者は足元の明るいうちに引き揚げんとする程にて、同胞の発展の為まことに憂うべきことである。母国の社会にてはこれらの事につき、殆んど一般に無関心のものであるが、日米関係は何らしても徹底的に解決をつけなければならぬ事である (296)⁶⁷⁾。

おわりに

鈴木無絃こと鈴木画一郎についての話は、長い間鈴木家ではタブー視されていた。鈴木家は、上海からの「引き揚げ者」だったので、引き揚げの時の話はよく聞かされていた。しかし、白髪でロイドメガネ、背広にネクタイの上に、コートとソフト帽をかぶって英字新聞を読んでいた祖父の話になると、母親は激昂していかに祖父がエキセントリックだったかを語り始めるのだった。

2008年に鈴木無絃という名で書かれた「驚き入つる母国の社会」を探し当て、五十郎という主人公の名で120もの異文化に関するエッセイを読んでいくにつれ、「あの当時に、なぜ彼は海を渡ってアメリカに行く気になったのだろうか」という単純な疑問がわき始めた。それ以前や同時代に国費でアメリカに渡ったエリート集団とは違い、一介の日本男子が妻子を残してアメリカに渡るとはどういう意味があったのだろうか。しかも、功も名も残さずに、である。そういう意味では、出稼ぎ労働者と同じかもしれない。否、出稼ぎ労働者の中にはそのままアメリカに残って財を成したものをいるのだから、それは当てはまらないかもしれない。

「驚き入つる母国の社会」から、いつも攻撃的だった祖父が、実は人種差別の標的にされたという事実も浮かび上がってきた。上海の租界で育った母には想像できないことであろう。同化をし、アメリカ人化をし、英語の学習にも熱心だったにもかかわらず、アメリカ化できない、つまり帰化不能外国人と一律にみなされたのは、鈴木無絃も出稼ぎ労働者もエリート留学生も同じであった。その共通点は、「白人ではない」ということであった。無絃の場合、日本で「驚き入つる母国の社会」という本を書いたのは、アメリカ人化した自分を日本で発見したからに違いない。我が同胞、我が日本国と思いつつ、無絃のアイデンティティはよりアメリカにあったのだと推測する。

鈴木無絃から現代に関連することは二つある。無絃がこの本を書いた年に、日本は関東大震災という未曾有の大災害を経験した。震災、国の経済困窮、定職を持たない若者が増え、

以前より閉塞感があるのは、現代にも通じるところである。しかし、英語教育の普及により英語が当時より身につけているはずの現代の若者は、留学に興味をもっていないという傾向がある。留学から帰ってきた時に国内で仕事が見つげにくいというのが理由の一つだとされている。それには、プル要因としての米国の経済と、日本政府の移民や留学のプッシュ要因が弱くなっているのも要因であろう。

二つ目は、現在日本にいる外国人労働者が、かつて日本人移民が味わったような経験をしていることである。つまり、昨今の不況のあおりで日系ブラジル人が「派遣切り」に合っているように、受け入れ側（この場合は日本）の都合で解雇や時には偏見の対象になっている、という点である⁶⁸⁾。

鈴木無絃に関して最初からもっていた疑問は、アメリカ人の差別に怒りながらも人種偏見の強いアメリカに、なぜもう一度戻ったのかということであったが、その答えは、はからずも最後のエッセイから読み取れた。

近時母国の社会にては労働問題がやかましくなり、時には不穏な運動を見る事もあるが、覚醒も程度を過ぎては却って害をなすのである。資本家が経済上の打撃を受け資金の運転に窮し、やむを得ず事業を縮小または中止し、人員を解雇せんとするに当たり、金を出せ仕事を与えよと迫るも是非なかるべく、世界は広くして人間至るところ青山あり、瀕死の状態に在る会社や工場へ押し掛け、無理な要求をせんよりは、むしろ思い切って海外へ出て、活動の余地のある所に於いて努力奮闘し、運命を開拓せんとするが最も賢明の道にして、又日本国家のためであると五十郎は信じて疑わないのである (331)⁶⁹⁾。

注

- 1) ベフ・ハルミ「はじめに」ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』(人文書院、2002)、7-13。
- 2) 阪田安雄「太平洋を跨ぐ北アメリカへの移住— 定住をめざす逆境での苦闘—」ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』(人文書院、2002年)15-36、17。
米山裕「環太平洋地域における日本人の移動性を再発見する」米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動— 在外日本人・移民の近現代史』(人文書院、2007年)9-26。によると、当時の海外移住には、大きく二つの流れがあり、一つはハワイ・北米・南米などへの「移民」であり、もう一つは、日本のアジア・太平洋地域の植民地などの進出にともなう「殖民」で、「殖民」は敗戦とともに引き揚げを要求された。同上、11。
- 3) ベフ、前掲8。
- 4) たとえば、児玉正昭『日本移民史研究序説』(溪水社、1992年)；東栄一郎、アケミ・キムラ=ヤノ編『アメリカ大陸日系人百科事典』(明石書店、2002年)；水野剛也『日系アメリカ人— 強制収容所とジャーナリズム』(春風社、2005年)。
- 5) タカキ・ロナルド「太平洋を越えて— 金のなる木を求めて」(糸井輝訳) 富田虎男 (監訳)『多文化社会アメリカの歴史：別の鏡に映して』(明石書店、1995) 419-464、419。
Ronald Takaki, A Different Mirror: A History of Multicultural America (originally published Little, Brown and Co.,1993)。
- 6) タカキ、前掲420；飯野正子『もう一つの日米関係史』(有斐閣、2000年)13。
- 7) 飯野正子、前掲14；阪田、前掲27。
- 8) 東栄一郎、前掲。

- 9) 飯野正子、前掲 16。
- 10) 阪田、前掲、20；飯野、前掲、16-17。
- 11) 同上。
- 12) タカキ、前掲 421。
- 13) Dairy, William, Jr, 南川文里 (2006) 樋口映美、中條献編「水平移動・人種・アメリカ化—移民をめぐるマスターナラティブ批判」『歴史のなかの「あめりか」』(彩流社、2006) 349-368、357。
- 14) 佐々木篁 (ささきたかむら) 岩手放送編『アメリカの新渡戸稲造』(盛岡市：熊谷印刷出版部、1985年) 16；阪田、前掲 29。
- 15) 阪田、前掲 19；飯野、前掲 20。
- 16) 阪田、前掲 33。
- 17) 鈴木無絃 (1924)『驚き入つる母国の社会』(第二版) (二松堂書店、1924) はじめに 2。オリジナルの旧漢字は常用漢字に直したが、言い回しはそのまま引用した。
- 18) 同上、35。
- 19) 同上、115。
- 20) 同上、116。
- 21) 佐々木篁、前掲 15-17。
- 22) 同上、15-30。
- 23) 同上、50。
- 24) 同上、131-132。
- 25) 坂口満宏「ネットトワークでつながる日本人移民社会」ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』(人文書院、2002年) 38-68。
- 26) 佐々木篁、前掲 147。
- 27) マックウィリアムス、ケアリー『アメリカの人種的偏見：日系米人の悲劇』鈴木二郎・小野瀬嘉慈共訳 (新泉社、1970年) 31. Carey McWilliams, Prejudice (Boston: Little, Brown and Co, 1944)。
- 28) 南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学—エスニシティ、人種、ナショナルリズム』(彩流社、2007) 14。
- 29) 貴堂嘉之「〈アメリカ人〉の境界と『帰化不能外国人』—再建期の国民化と中国人問題」油井大三元・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ：世界史の中のアメリカニゼーション』(大学出版会、2003) 52-71、34。
- 30) 岡部牧夫『海を渡った日本人—日本史リブレット五六』(山川出版社、2002)；オッペンハイム・ジョアンヌ『親愛なるブリードさま—強制収容された日系二世とアメリカ人図書館司書の物語』今村亮訳 (柏書房、2008)。
- 31) マックウィリアムス、前掲 31、119。
- 32) 鈴木無絃、前掲 258-259。
- 33) マックウィリアムス、前掲 119；ノムラ・ゲイル「日系アメリカ女性の歩み」『日系アメリカ人の歩みと現在』ハルミ・ベフ (編者)、人文書院、2002年、98-130、111。
- 34) 鈴木無絃、前掲 9。この引用の一部は以下の本にも掲載。杉野俊子「太平洋を渡った日本人、帰ってきた日系人—グローバリゼーションの落とし子は故郷に錦を飾れたか？」杉田米行 (編著)『グローバリゼーションとアメリカ・アジア太平洋地域』(大学教育出版、2009) 30-57。
- 35) 鈴木無絃、前掲 302-306。
- 36) マクウィリアムス、前掲 34-35。
- 37) タカキ、前掲 430-431。
- 38) 同書、410。
- 39) 鈴木無絃、前掲 295-296。
- 40) マクウィリアムス、前掲 36-37。
- 41) 同上。
- 42) 鈴木無絃、前掲 298-299。
- 43) マクウィリアムス、前掲 66。
- 44) 飯野、前掲 33。

- 45) マクウィリアムス、前掲 86。
- 46) 鈴木無絃、前掲 325-326。
- 47) タカキ、前掲 459；今田英一『コロラド日本人物語——日系アメリカ人と戦争、60年後の真実』（星雲社、2005年）54。
- 48) 鈴木無絃、前掲 8。
- 49) 上記、318-319。
- 50) タカキ、前掲 459
- 51) 鈴木透『実験国家アメリカの履歴書』第二版（慶應義塾大学出版会、2005）122；飯野、前掲 65。
- 52) タカキ、前掲 460-461。
- 53) 南川、前掲 135-136。
- 54) 鈴木無絃、前掲 8-9。
- 55) 上記、422-423。
- 56) 飯野、前掲 26。
- 57) 上記、28。
- 58) 上記、35。
- 59) 前掲、南川、77-78。
- 60) マクウィリアムス、前掲 63-64。
- 61) 上記、128-129。
- 62) 上記、130。
- 63) 鈴木無絃、前掲 323-324。
- 64) ノムラ、前掲 112；鈴木無絃、前掲 41。合衆国併合後、二世の潜在的投票権に関する懸念が増大した。（参照）レイン・リュウ・ヒアバヤシ「レイン・リュウ・ヒアバヤシ「権力編の道——エスニシティから見た日系人に特有な政治的伝統の出現」『日系人とグローバリゼーション：北米、南米、日本』レイン・リュウ・ヒアバヤシ他（編）244-276 人文書院、2006、253。
- 65) 鈴木無絃、前掲 324。
- 66) 上記、314。
- 67) 上記、296。
- 68) 参考として Toshiko Sugino, Nikkei Brazilians in a Brazilian School in Japan: Factors Affecting Language Decisions and Education（慶應義塾大学出版会、2008）。
- 69) 上記、331。

（すぎの としこ 本学教授）